

系譜学のすすめ

友 永 昌 紀
友 永 州 一郎

一 はじめに

系譜学というと難しく聞こえるが、言い換えれば先祖探しや家系調査にあたるもので気軽に趣味として活動している方も多い。

海外では人気を博しており、特にアメリカでは一九七〇年代後期に大ブームを起こした。日本でも近年インターネットの普及と発展により、情報の収集や仲間との交流が容易になったことで活動が盛んになっている。

系譜学は歴史との繋がりが深く、その研究結果により、さらに詳細が明らかになったり、新事実が判明する場合もある。自分の先祖を調べるといって個人レベルの趣味から導き出された答えが、歴史的背景をともなつて様々な分野へと波及し、専門的研究を要する形へと変化していく。

そういった自然な流れの中で知識を深め、またその成果を

実感することが出来る為、趣味から研究へと発展するパターンも多いようである。

私達もそのうちの一人であり、自分の先祖を探している間に浜脇の歴史研究に魅せられてしまった。特に温泉と旅館街の発展に先祖が深く関わっていたことが、この研究を続けることの大きな要因といえるだろう。

系譜学というより、私達兄弟の足跡という程度のもので研究結果というには稚拙すぎて誠にお恥ずかしい限りであるが、これから始めてみようと思われる方がかりにして頂ければ幸いである。

二 亡き祖父からの贈り物

平成二十年五月、祖父が亡くなった。私は家庭の事情もあって祖父母に育てられた。私にとっては親を失うことと同じであり、今までの人生で味わったことのない、耐え難い悲しみであった。何もしてあげられなかった後悔と、大きな喪失感。いつの時も私を見守ってくれていた。その愛情が返って胸に突き刺さる。気がつけばびたすらに心の中で詫びの言葉を繰り返していた。

通夜、葬儀を終え、火葬場へ向かうまであつという間に時

は過ぎた。その間一睡もしなかったのに。つい何日か前までは愛する身内がこの世を去るなど考えもしなかった。今、目の前にいる祖父は白骨となり、やがて土へと還る。もう私の手の届かない世界へと旅立ってしまった。この世の無常の意味を自らの命で示し、何にも変えられぬ愛情を私に授けて。寂しさと悲しみから解放されることはなかったが、日常へ戻ったことで少しだけ気持ちよくなることはできた。

思い出せば辛くなる、だがどうしても頭を離れず思い出してしまうことがあった。祖父の昔話、それは明治の頃、当家は浜脇で旅館を経営しており立派な家柄だったということ。幼い頃からずっと聞かされていた昔話。旅館の名前は「湊竹」、経営者の名は竹五郎。他の友永家も旅館を経営しており、浜脇では有名で皆親戚だったと。

今までは聞き流していた昔話が、日を追うごとに祖父の残してくれた宝ではないかと思うようになった。弔いと詫びと、感謝の心でその大切な宝を一生を費やしてでも磨き上げていこうと思った。元々歴史には長けていた弟に胸の内を伝えようと即座に一緒にやろうと返事があった。まだ見ぬ先祖に会い合う為、兄弟二人での長い旅が始まった。



〈無量山長覚寺・浜脇 2-2-14〉

三 無量山長覚寺へ

まず、手始めに菩提寺への訪問を決めた。今考えると浅はかであったとしか言いようがない。

永享年間（一四二九〜四〇）に高崎円信により開基された真宗大谷派の寺院である。地元浜脇では「下ん寺」の愛称で親しまれている。

御院家さん（真宗ではお坊さんをこう呼ぶ）は大変ささくな方で、訪問を快諾して下さった。江戸時代以前の古い先祖の名前がどうしても知りたかった為、ここぞとばかりに弟と二人で気合十分で望んだが、結果はあっさり玉碎

であった。

当たり前である。屋号（一族としての）を聞かれてもその意味すら解らず、古文書も読めないくせに人別帳が見たいと迫り、先祖は武士だと言ってきかず、挙句の果てには大友宗麟に名前をもらったなどと口走る。終始こんな調子だったので先祖探しどころか、自分自身を客観的に見直さねばならなくなつた。だが、こんな私達に御院家さんは至極丁寧に教えて下さつたのである。

※ 長覚寺の檀家であり、むらぎみ、湊屋、高田屋、塩屋の屋号を持つ四大友永家の存在。

※ 長覚寺建立以前から浜脇にある歳の神のたなかやぶという一帯に友永氏が住んでいたという口伝があること。

※ 浜脇の歴史に詳しいと言われている方々の所在。

当時はこの話の意味を上手くとらえることが出来なかつたが経験を積み、後々研究が進むにつれ、先祖探しの大きなキーワードであつたことに気づかされることとなる。手を合わせ、本当にありがたいことだと感謝するばかりであつた。

四 除籍謄本は貴重な情報源

先祖探しと言っても私達兄弟は知識においてド素人。いき

なり菩提寺へ飛び込むなど恐れ多いことであつた。まるで話にならない自分を戒めて一からネットで学習のやり直しである。

あくまで直系の家系に限定し、まずは管轄の役所へ行き、遡れるだけ遡って除籍謄本を取る。地域によって違う場合もあるが、一通七〇〇円〜七五〇円くらいである。これだけでも運が良ければ五〜六代前までは判明する。文化、文政の頃に生まれた先祖の名前や関係を窺い知ることができれば上出来と言える。ただし養子縁組などで家系を繋いでいる場合は、純粋な直系ではないため現在の家系で遡れないことがあるので注意が必要である。

問題は傍系である。基本的に委任状を書いてもらうか、本人に直接請求して頂くしかない。先祖調査や系図作成には必要不可欠であるが、個人情報に厳しいご時勢である。普段から付き合ひのある親しい傍系ならまだしも、そうでない場合は唐突に協力依頼をしても怪訝な顔で断られてしまうだろう。まずは手紙でご挨拶が妥当であるが、著名な方をお願いするのは大きな効果があるようだ。

私達の場合は今日新聞の小野さんに仲介をお願いしたところ、すぐに先方様より良いお返事を頂けた。皆様の暖かい御

心遣いのおかげで私達の手元には今かなりの家系の除籍謄本がある。一枚一枚目を通す度、私達の宝物なのだと感謝の気持ちでいっぱいになる。

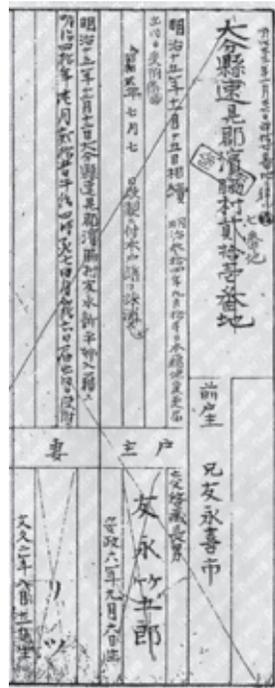
取得に困難を極める時もあったが、信念と情熱と誠意で、見えない壁を乗り越えられた時もあった。信用を得ることの大変さと大切さを先祖が教えてくれたのだと思えてならない。

平成二十一年六月一日より法改正で保存期間が以前の八十年から百五十年に延びた。そのおかげで別府では復活した除籍謄本も見られるようだ。

当家は運よく一件復活したことで、より詳しい家族、縁戚関係を知ることができた。一度廃棄扱いになってしまうとほぼ復活が望めない為、興味をもたれた方は早目の取得をおすすめする。多忙であったり、遠方で管轄の役所へ出向けない場合は郵送請求もできるので多めに活用して頂きたい。ただ除籍謄本は、先祖調査という理由での請求は通らないので注意が必要。一般的には墓相続や菩提の整理などの理由が望ましいようである。

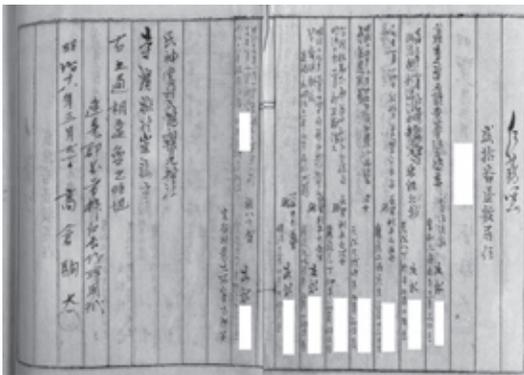
現在請求可能な最も古い戸籍は明治十九年式戸籍というもので、筆で丁寧に入されている。変体仮名や旧字体で記さ

れている部分も多いので判読に手こずることも多いが家を単位として戸主を中心に直系、傍系の親族が多数記録されている為、当時の家族関係を知るのに非常に貴重な資料と言える。



〈明治 19 年式戸籍・別府市役所〉

十九年式戸籍の前に一級資料と呼ばれる明治五年式戸籍（壬申戸籍）があるのだが、現在行政文書非該当扱いとなっており残念ながら閲覧は禁止されている。



〈壬申戸籍・大分県立図書館蔵〉

五 再会 新境地へ

除籍謄本の取得を始めたものの、私達はすぐに行き詰ってしまった。直系は比較的容易に取得できたものの、傍系をどうしたらいいのかわからない。

旅館を廃業した後、うちの先祖は台湾へ渡ってしまった為、浜脇へ帰って来た時には他の友永家とほとんど付き合いがなくなってしまうていたのだ。当時挨拶をかわす程度のことではあったのだが、曾祖母の代までで、祖父の代になってからは完全に忘れてしまったようだ。傍系を探そうにもその手立ても、つても全くない。

二人で聞き込み調査してみたが、なにせ明治時代のことなので、湊竹旅館という名前も、まして当時の繋がりなど知る人などいるはずもなかった。かろうじて湊六旅館の名前と場所が聞けたくらいであった。

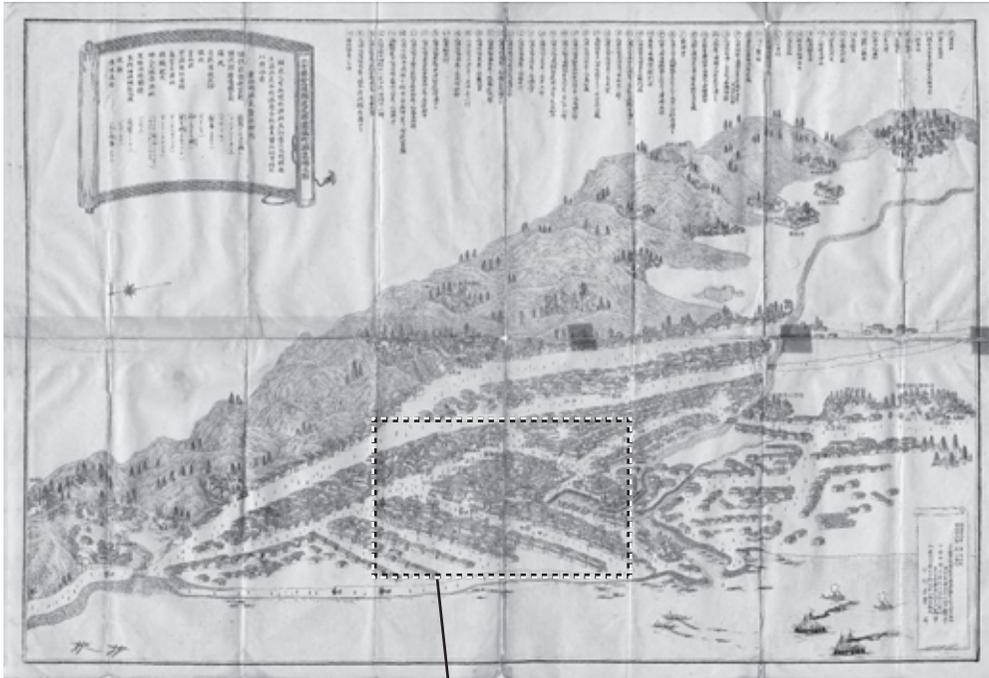
別府図書館へ行き、手当たり次第に関連のありそうな本を読み、友永を名乗る人物を拾い出すことはできたが、それ以上の進展もない。全く知識がないために本を探すにも的を絞れず、時間がかかりすぎてしまう。光明を見出せず、私達の先祖探しは暗礁に乗り上げていた。

途方にくれ、棚に並ぶ本をぼんやりと見ていたその時だっ

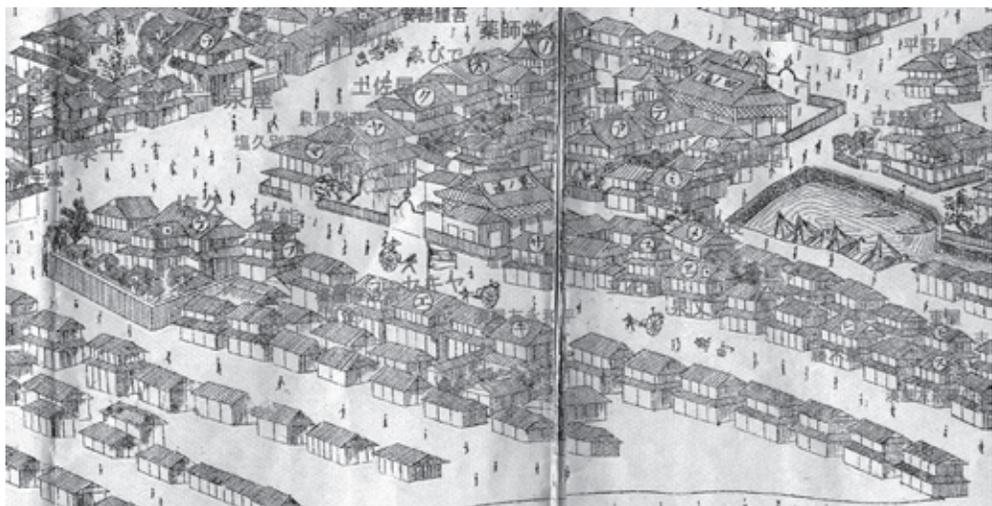
た。手に取った一冊の本それは我が恩師、恒松栖先生の著書であった。思い切って電話をしてみた。不安もあったが、そんな不安は会話が始まった瞬間に吹き飛んだ。私は再び生徒として先生から学べる機会を得ることができた。今度は弟も一緒だ。私達の道に光が射した瞬間であった。

後日、先生のご自宅へ伺った。史談会の存在も、先生が沢山の本を書かれていることも、様々な活動を精力的になさっているということも、恥ずかしながらその時初めて知った。自分の視野の狭さに気づかされ、猛省するばかりだった。先生は私達がこういった活動をしていることをすごく喜んで非常にわかりやすく、丁寧に指導してくださった。具体的にターゲットとなりうる本も全て紹介して頂いた。今後の指針と研究の方向性を決め、目標を定めて活動できるように導いてくださった。

ここから私達の研究は今までの停滞が嘘のように飛躍的に進歩することとなる。書物から得られる数多くの情報と、先生からご紹介頂いた新たな師との出会いによって。恒松先生なくして今の私達はないと思っている。ただただ、感謝である。



〈明治 29 年 大分県豊後国速見郡浜脇町温泉場之図 小野弘氏提供〉



〈明治 29 年の図部分拡大図〉

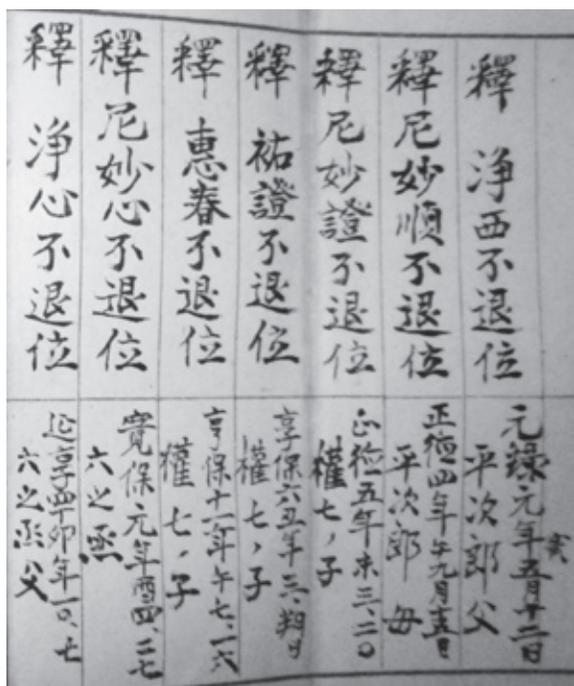
号と経営者の名を記していた。私達は初めて見る本格的な研究資料の凄さに驚かされ、言葉を失っていた。そしてそんな私達の胸中を知ってか知らずか小野さんは次々に他の友永家の経営者の名前と資料をあげていく。

もう十分であった。私達は何も知らなかったのだ。浜脇の歴史も友永家のことも、何一つ。小野さんは古い字図も出して私達の先祖が経営していた旅館の場所や自宅を的確に示していく。レベルが違いすぎる、私達はまだ小野さんの話についていけないのは持っていない。惜しげもなく沢山の資料を提供して下さり、知恵と知識を授けて頂いたが、今の私達では到底使いこなせない。新しい師である小野さんは、先生と同じくまだ高すぎる山であった。ただ、嬉しいことに私達の真剣な思いと情熱を誉めて下さり、何度も助けて頂ける機会を得るに至った。小野さんから頂いた資料は全て大切に保存してある。大変役立つ貴重な資料ばかりで、何かある度出して見直している。

この出会いが湊屋を名乗る浜脇友永家の繋がりを解明する大きな糸口となったのは言うまでもない。尊敬と感謝、この言葉に尽きる。

七 百年ぶりに親戚と

小野さんとの交流を重ねるうち、ついに平成二十四年三月六日、他の友永家への訪問が実現することとなった。以前懐かしの別府ものがたりで紹介されているのを見てこれからの研究には絶対に欠かせないと思ひ、仲介をお願いした次第である。既に小野さんがかなり掘り下げて調査されており、前知識をつけて訪問することが出来たので、非常にスムーズな交流を図ることが出来た。



〈むらぎみ友永家過去帳 友永直喜氏提供〉

実に百年ぶりの交流復活である。漁民の長としてむらぎみという屋号を持ち、浜脇友永一族の中でも代表的存在である友永家だ。同家子孫の友永直喜、久仁子ご夫妻とお会いし、貴重なお話を伺うことが出来た。むらぎみ友永家の歴史を少しご紹介させて頂くと明治期に別府町の収入役を務めた友永餘六を輩出した家である。

除籍謄本から判明した最古の戸主は曾吉。妻はサエダ。曾吉は後継者がいなかった為、湊平旅館友永平次郎の次男餘六を養子に迎えている。平次郎の長男織太郎（後に平次郎と改名）は町会議員、餘六は収入役を務め、浜脇友永家の一時代を築いた。

曾吉の先代権左衛門は江戸末期の資料（浜脇、田野口両村湯薬師仏極書 寛政八年）の情報から想像するに、町惣代（監査役）を務めた人物である可能性が高い。その他同家には元禄元年（一六八八年）に始まる過去帖や、江戸時代より伝わる豊漁祈願の木彫りのえびす像、親鸞上人直筆と伝わる建暦二年作の南無阿弥陀仏の掛け軸等が現存しており、その歴史は深い。多数の古文書が保存されていた事でも知られる浜脇でも有数の旧家である。

最初の訪問以来、むらぎみの友永さん宅には何度もお邪魔

させていただき、一緒に食事をしたりお墓参りもした。浜脇芝生墓地にある友永一族の墓の詳細を知る最後の世代でもあり、沢山の情報を教えて頂いた。直喜さんの父である友永直さん（むらぎみの大将と呼ばれていた）の書かれた冊子、むらぎみ日記（昭和四三年発行）を記念にと頂いたり、今でも申し訳ないくらい可愛がってくださる。

だが大変悲しいことに奥さんの久仁子さんが、平成二十六年五月二十二日に亡くなられた。最後に訪問したときはまだ元気だったのだが、少しお痩せになっていたので気になって聞いてみると、病気療養中であることを明かしてくれた。帰りに久仁子さんから頂いた言葉を私達は決して忘れないだろう。

ご恩返しが出来るように、約束が果たせるように精一杯弟と二人で頑張ります。

七 浜脇湊屋 友永一族

この項では幕末から明治にかけて活躍した湊屋を称した友永一族のなかでも、代表的な人物と参考文献をご紹介したい。次項の墓地の位置関係図、系図と合わせてご覧頂くとわかりやすいと思う。

(除籍謄本は除く)

※ 文政十一年 豊後國速見郡濱脇浦 御用書控扣帳
(別府市立図書館所蔵) ※コピーであり原本は不明

湊屋数助 廻船宿 (後の湊平旅館)
湊屋仙右衛門 廻船宿 (後の湊六旅館?)
濱脇村権左衛門 (むらぎみ?)

※ 浜脇村で廻船宿を営んでいた数助の残した文書。



湊平旅館の
経営者友永平
次郎の戸籍に
祖父として数
助の名が記載
されている。
仙右衛門、権
左衛門に関し

ては湊六、むらぎみの墓石にその名が刻まれており、世代的にも数助と重なる為、該当の可能性が非常に高いと思われる。

※ 明治二十年 豊後國別府村濱脇村諸用案内記

(国立国会図書館所蔵) デジタル資料のみ

湊屋 友永安太郎 (入湯御定宿、味噌売捌、煙草製造卸売)
港屋 友永平治郎 (入湯御定宿、製氷業、汽船問屋)

※ 最も古いと思われる当時の別府と浜脇の商家案内。

友永平治郎の項は湊の字が港に変わっている。

本家港屋の記載があることから、商いを最初に始めたのが平治郎の家系であったといえるだろう。

友永安太郎の墓も共に浜脇芝生に建立されている。

明治二十九年 大分縣豊後國速見郡濱脇町温泉場之圖

(小野弘氏提供)

湊屋 友永平治郎 (入湯御宿、製氷業、汽船問屋)
湊屋 友永和平 (入湯御宿、煎鰯製造) (後の湊六旅館)
湊屋 友永作四郎 (入湯御宿、古書販売) (後の湊作旅館)

※ 小野さんより最初に提供頂いた資料である。時代背景的なものだろうか、また湊の表記に戻っている。友永和平は湊六旅館の経営者友永六之丞の父として戸籍に記載されている。和平は別府町の収入役を務めており(むらぎみ友永餘六より前)、湊六旅館もかなり浜脇で有力な家系であったのだろう。この頃より四番目の湊屋、友永作四郎が商いを始めた

ようだ。

明治三十一年 豊後温泉案内

※(国立国会図書館所蔵) デジタル資料、館内閲覧のみ

本家港屋	友永平次郎 (入湯御宿、製氷業、汽船問屋)
湊屋	友永和平 (入湯御宿、煎鰯製造)
湊作	友永作四郎 (入湯御宿、古書販売)
蛭子屋	友永潤六 (和洋蠟燭、砂糖諸油雜穀、荒物小間物販売)

※ この本も小野さんよりご紹介頂いたものである。

山口県立図書館に唯一原本が一冊だけ残り、閲覧可能。

大変貴重であるので、弟と実際山口まで行き写真に収めた。

ここで平治郎が平次郎表記となる。意外ではあったが後に当主の名前を屋号と組み合わせる流れとなった形は作四郎が発祥なのだろうか。この時既に湊作を称している。蛭子屋はご存知あの松原公園そばにあったえびすやの前身である。こちらの墓も同じく芝生に建立されている。

上記以外にまだ多数の資料、文献が残っているが頁数の関係もあるのでこれくらいに止めておきたい。

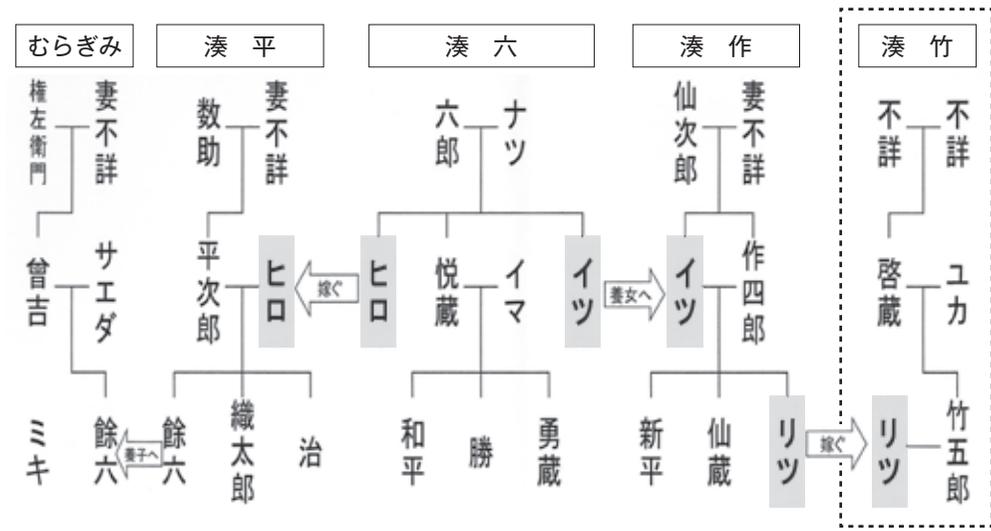
九 芝生墓地の調査、照合

先祖調査の足取りとして代表的なものを紹介させて頂いたが、これまでに集まった貴重な資料を基に、一つの区切りとして湊屋友永一族の繋がりを示す簡易的な系図と、現代にその証拠として残っている浜脇芝生墓地にある墓石の位置関係の図を作成したのでご覧頂きたい。

ここに挙げた諸氏の墓は全て浜脇芝生墓地の中にあり、同じ区域に横一線に並

湊屋	友永 安太郎
湊屋	友永 トナセ
釘宮家	
湊作	友永 作四郎 (妻)イツ
湊平	友永 数助 友永 平次郎
むらざみ湊六合同墓	友永 和乎 友永 仙右衛門 友永 餘六 友永 権左衛門
不明	徳蔵
湊竹	友永 竹五郎 (妻)リツ
佐藤家	むらざみ親威
えびすや	友永 潤六
湊平の弟	友永 治
むらざみ	友永 権右衛門

〈浜脇芝生墓地 湊屋友永家相関図〉



〈友永家家系略図〉（点線の囲みが当家）

んでいる。家紋は全ての家が下がり藤であり、一族または縁者であることを示す為に同じ区域に建立したと考えられる。この調査結果から浜脇友永家は幕末から明治初期に廻船業を中心に台頭し、湊屋の屋号を用い、後に当主の名前を屋号と組み合わせる流れとなったのであろう。

その他にも当時の浜脇には、

塩熊旅館 友永奎三郎（後に友永環へ継承）

梅屋旅館 友永傳四郎、

享保年間の古い過去帖がある高田屋友永家

などがあり同族である可能性が高い。

その中でも幕末に台頭した4大屋号（湊屋、塩屋、高田屋、むらぎみ）を持つ友永家に於いて最も勢力を誇ったのは、本家と言われるむらぎみとその支流の湊屋であったと言える。

漁民の長の称号むらぎみを屋号とする友永家と、湊屋を称する平次郎家を中心に一時代を築き、港町として、また浜脇温泉旅館街の発展に貢献した一族であったことは、当時の資料を見ても明らかである。

前述したように浜脇の友永家は一族一党皆親戚と、どの家も伝承されているが証拠となる記録は表に出ておらず、口伝

によるものだけであった。おそらく江戸時代、またはそれ以前に本家から各支流に分かれ、明治の頃まではその繋がりを詳しく知る者もいたことであろう。残念ながら今に系図を伝える家も無く口伝に留まるかと思われた。

だが幸運なことに、我が家の明治時代の当主であった友永竹五郎の除籍謄本から直系、傍系を辿る事で近年最後の一族の繋がりを示す記述が見つかったのである。図のようにむらぎみ、湊平、湊六、湊作、湊竹の五家が繋がったのである。幕末の頃の繋がりが、僅かでも事実として証拠を得られたことを本当に嬉しく思っている。

祖父の昔話を本当の宝物に昇華できた瞬間であった。たとえこの世を離れても、祖父、いや全ての先祖の愛情は変わらずいつも自分の傍にある。そのおかげで今の自分があるということを心の底から感謝し、手を合わせた。

参 考 文 献

- 文政十一年 「御用書扣帖」 湊屋数助
- 明治二十年 『豊後國別府村浜脇村諸用案内記』
編纂人 新田長松 出版人 西瀬平
- 明治二十九年 「大分縣豊後國速見郡濱脇町温泉場之圖」
著作者兼発行 二宮庸平、宇戸高市
- 明治三十一年 『豊後温泉案内』
著作者 安部貞一 出版者 齊藤彌之吉
- 大正三年 『別府町誌』 別府町役場
- 大正九年 『別府旅館能力調査表』 編集・発行者 岡野定治
- 大正十二年 『豊後温泉地旅館名簿』 別府宿屋組合事務所
- 昭和四十三年 『むらぎみ日記』 著者・発行者 友永直
- 昭和五十六年 『豊後國速見郡天領史料』
編者 入江秀利・藤内喜六
- 平成七年 『江戸時代の別府温泉史料集成』 入江秀利
- 平成十三年 『天領横灘ものがたり』 入江秀利
- 平成二十一年 懐かしの別府ものがたり「写真今昔」「浜脇物語」
著者 小野弘